すれば信生活であって、信心という真諦に包含されることとなる。信巻に常行大悲の益、知恩報徳の益があげられてあるのは、この意味ではないであろうか。されば真俗二諦という語は真宗的真諦を誤らせるおそれがあるように思うのである。この点を明かにするために浄土門的道諦を信心念仏報謝としてはいかがであろうか。

華厳経における弥勒について

山田亮賢

『華厳経』が普賢と文殊の二菩薩を中心として、特に普賢行が全体を貫ぬいて強調し説かれていることは今更言うまでもないことである。しかしこの『経』の終りに至って弥勒菩薩が現われ、所謂「入法界品」の善財童子の善知識として特殊な役割を果していることは、普賢、文殊の二菩薩と共に留意すべきものがあると思う。一体『華厳経』が現存の漢訳においては、六十華厳、八十華厳共に一部、二部の構造によって成立していることを見るのであるが、この中、第一部においては、弥勒菩薩は現われていない。従って第二部と見られる「入法界品」においてのみ弥勒が現われているのである。勿論第二部と見られる「入法界品」は、善財童子が五十三善知識歴訪の過程を説いているのであるから、第一部の場合とは、自ずから構造の上に相違あることは当然である。今は特に「入法界品」における善知識として弥勒が現われねばならなかった意味が如何なるものであるか、その一点に関心を向けて考察したいと思うのである。

「入法界品」における多くの善知識の中、菩薩の名において登場せるものは、比較的数少ないのである。普賢、文殊、観音、正趣、弥勒と五菩薩を数えるのみである。出家の比丘、菩薩に比して東家の善知識が数多いのも善財童子の地上遍歴求道の旅の特色を示すものであると共に、また『華厳経』が一乗仏教としての特徴を示すものとも言えるであろう。とはいえ、ここに登場せる菩薩は、この「経」として欠くべからざる重要な役割を果す為であるに違いない。このような意味からこの五菩薩の現われる順序、またその説く法門が問題とされねばならない。この中、観音と正趣の二菩薩の登場は勿論、看過し得ざる意味が存するのであるが、ここではこの二菩薩に関しての問題を略して、普賢、文殊、弥勒の三菩薩の登場の意義に局限して見ることとする。『華厳経』が普賢、文殊によって統摂されることが周知のことであるために、ここに現われた弥勒の意義が見逃され易いのである。実際、善財童子の善知識歴訪が一応終ったかの感のするところにおいて、最後に弥勒が現われ、法蔵が『探玄記』において言う所謂「末会」の六分の一に及ぶ大量の所説が弥勒によって賞やされている。このことのみを以てしても、そこに特別な意味が存すると言わねばならない。ただ量において多量ではあっても所説の形式は他の善知識歴訪の場合と異っているのではなく、前の善知識の勧進と、善財の見敬申請、更に弥勒の授法という順序を示している。従って内容の豊富さのみで、その他に弥勒登場の意味があまり注目されなかっ

たのではなかろうか。

法蔵は『探玄記』第十八巻に五相の善知識として分類し、第一を寄位修行相として四十一人の善知識を順次に、信、住、行、向、地に配し、第二に摩耶善知識以下十一人を会縁入実相と為し、第三に弥勒一人を摂徳成因相、第四、後文殊一人を智照無二相、第五普賢一位を顕因広大相と解している。それぞれ意味のあることであるが、第三の弥勒に関して摂徳成因相と為していることは至当なことである。弥勒は、善知識の重要性を強調し、菩薩道における発菩提心の功徳を言葉の限りを尽して讃えているのであるから、摂徳成因相の説明を以て適切なものと言えるのである。その点においては、よく弥勒の所説を捕えたものと言える。今は滔々と説く実に勝れた弥勒の所説の内容を論つらうことをここで目的とするのでないから、法蔵の卓越した見解に従うのみであるが、何故に弥勒がここに登場しなければならなかったか。また何故にここに至って善財が弥勒より受法しなければならなかったかの理由がこれのみでは明らかにならない。

ここにおいて弥勒出現の必然性について、『経』の意図する特別な理由を弥勒という菩薩の性格からうかがわねばならないものがある。

法蔵の言う「末会」の最初に文殊が祇園精舎の「善安住楼閣」より出でて南方遊行を始める。その文殊を発見した舎利弗が海智比丘以下六千の比丘を伴って文殊の後を追い、文殊によって発菩提心が説かれ、普賢行を勧められる。このことは、声聞の舎利弗と大乗菩薩の文殊との関係を示す極めて重要な意味を持つものであり、過去の教団の代表者である舎利弗が文殊の教えを受け、文殊の精神に融ぜられ、新たに善財が未来の求道者として現われるのである。この「入法界品」の「末会」の最初の舎利弗と、最後の弥勒とがこの構造においては対応せしめられていると思われる。即ち弥勒は善財の現在の善知識であり、同時に「命終して兜率天に生れ、そこから命終し下生して正覚を成ずる」未来仏であることを自から言っているのである。ここに未来仏としての弥勒が現われねばならぬ必然性があり、『経典』の意図するものが始終完たからしめているを見る。弥勒が改めて文殊を讃え、文殊に還ることを善財に勧め、文殊が更に普賢行を指南するという最後の場面は実に甚深の意味を持つものと言える。

『大無量寿経』やその他の大乗経典に現われている弥勒の意義と共に『華厳経』における弥勒出現の意味は更に深く追及さるべき課題を持っていると言わねばならない。

宗祖に於ける「已」と「既」の用語例と其の意義について

大門照忍

『御本書』御自釈に過去的事象を述べ給ふ二種の用語、「已」と「既」の区別を窺ふと、前者は、総序「難レ遇今得レ遇難レ聞已得レ聞」、「行巻」「如来已発願回二施衆生行一之心也」「已能雖レ破二天明闇一」「信巻」「如来本願已発二至心信楽欲生誓一」「阿弥